夢や志をかなえる学力の育成

～志教育の推進と非認知能力の育成を通して～

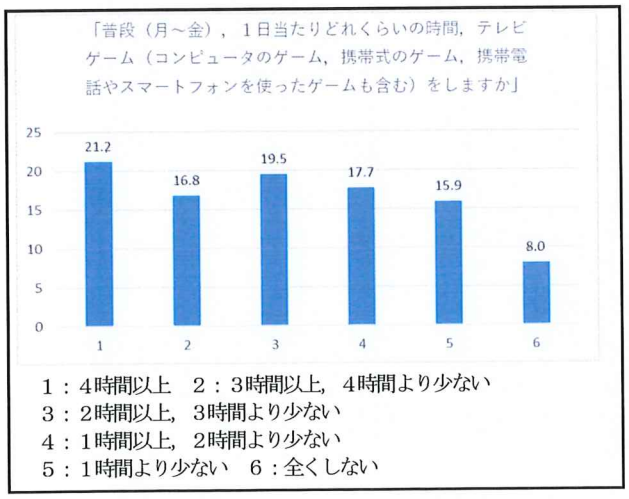
宮城県白石市立白石中学校
校長　樋口　英明

1　はじめに

子どもが人生において成果を収め，志を実現し社会進歩に貢献するためには，バランスのとれた認知的スキルと非認知的スキルが必要と言える。

昨年度市内で実施した学力調査において，本校の生徒たちの結果を分析すると，全国平均や県平均を上回る結果を残せた教科も増えてきている。しかし，課題としては学力の二極化傾向が挙げられる。この二極化傾向の生徒を見ると，上位層群は日々の学校教育で行う志教育により益々学力を向上させていくが，下位層群は志教育だけでは学びに向かう力が弱いために学力向上に向かうことは簡単ではない。また，昨年度の全国学力状況調査の生徒質問紙における「スマホやゲームをする時間」(図１）と学力の相関関係を見るとスマホ・ゲームをまるでしない層よりも１時間以内でやめる層が学力が高かった。このことから，学校が目指す方向としては，生徒がスマホやゲームをはじめとする日常生活を自己管理できる能力を高めることが学力向上にもつながると考えた。

今年度の本校の努力事項を「立志」とし，生徒たちの自律（自立）のために，全職員で共通理解を図り，生徒たちの非認知的スキルの向上を目指した教育活動を実践していく。



(図１　令和３年度「スマホやゲームをする時間」)

2　取り組みの概要

（1）マイルールの活用

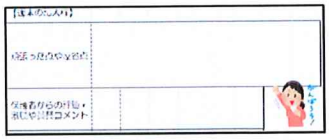
生活に関する課題を受け，生活改善の取り組みの一つとして，『マイルール記録カード』(図２）を作成し，取り組むこととした。生徒一人一台配布されているタブレットを活用した。

(図２　マイルール記録カード)

一週間の初めに自分の今週のマイルールを決め，毎朝登校後に各自が昨日の自分を振り返り，入力した。視覚的に捉えやすくし，意欲を高めるためのグラフ化や，各項目の１か月の総時間数を自動的に集計できるようにした。(図３）

週末にはタブレットを持ち帰り，１週間の反省をすると共に，保護者にもコメントを記入してもらった。(図４）

(図３　１か月間の集計)



(図４　週末の振り返り)

（2）幼・小・中連携

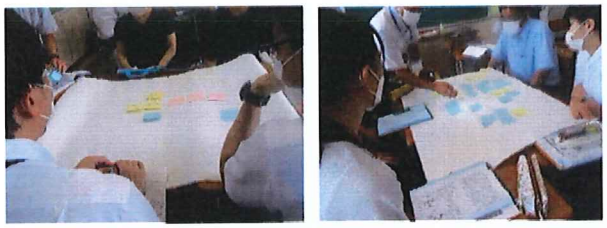
幼・小・中連携するねらいとして，自律（自立）し，自己管理能力を高めていくことは，家庭生活はもちろんのこと，幼少期からの非認知的スキルの積み重ねが特に重要である。そのため，幼・小・中の教職員が一

堂に会し，子どもの自律（自立）のために，各園・学校が発達段階を踏まえてどのような教育活動を展開しているのかを教職員間で情報共有することである。その中で，非認知的スキルの向上を目指した教育活動を系統立てたものにし，積み重ねていくことで，自律（自立）し自己管理能力を高め，すべての子どもが志を実現し，社会進歩に貢献できるように成長させることをねらいとして実施した。

具体的な内容は，本校と市内の別の中学校を会場にし，①授業参観（本校で５教科，他校で３教科）②授業分科会（図５）③幼・小・中合同研修会である。

（図５　授業分科会）

③については，各グループに分かれ，話し合いの視点や，育成すべき資質・能力，非認知能力，自律と自立の違いなどについて確認し，話し合いを行った。話し合いの視点は『子どもが自分のことは自分で決めるなどの自己管理ができる自律（自立）のできた子どもたちを育成するためには，それぞれの校種や園でどのような取組を大切にしているか。』とし，ＫＪ法を用いて実施した。（図６・７）参加していただいた方々から研修会後にアンケートを実施した。（図８）幼・小・中の発達段階に応じた有意義な話し合いができた。



（図６　幼・小・中合同研修会）

（図７　ＫＪ法で完成した模造紙）

【参加者の感想】（一部）

・幼・小・中の学習内容のつながりを感じることができた。

・他校種の先生方の様々な視点から意見を聞くことができたことが新鮮で，とても勉強になった。

・自律という目標に対して，小学校・中学校の発達段階に合わせて取り組みを考えることができ，今後の教育に生かせると感じた。

（図８　アンケートの一部）

（３）中・高連携

『大学進学まで意識した中学時代の勉強法を知る会』と題して，地元の進学高校の先生に来ていただき，希望する生徒たちに講義をしていただいた。

ねらいは本校では将来は大学進学までイメージしている生徒が多数いる。しかし，多くの生徒は大学に進学するために中学時代にどのように学習をしていくべきなのかつかめないでいる。そこで，中学校３年間の進路指導という意識ではなく，本校の多くが希望している高校と連携を図り，６年間の進路指導という意識で，希望する生徒に学習指導をしていくことをねらいとして実施した。（図９）

（図９　参加した生徒たちの様子）

生徒たちは高校入試と大学入試の違いを知ることができ，今後の学習への取り組みについて，決意を新たにしたようである。（図10）

【参加者の感想】（一部）

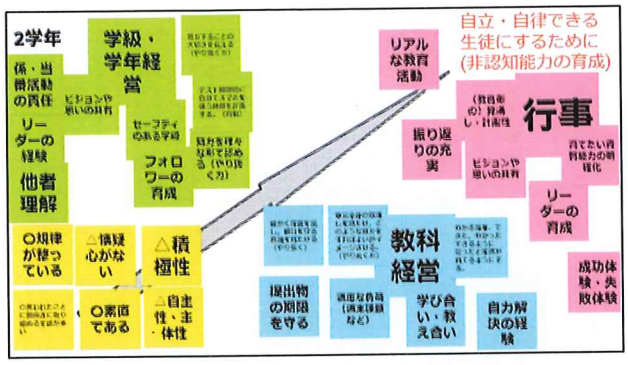
・高校受験と大学受験の違いや，今自分がやらなければならないことを自覚できた。特に中学生のうちから「思考力・判断力・表現力」を身に付けることが大切で，高校生になってからそれらをすぐに身に付けることは難しいことなので，意識していきたいと思った。

・私はなかなか成績が伸びず悩んでいました。でも話を聞いて，すぐに結果が出なくても諦めず勉強を続けて頑張ろうと思いました。疑問に感じたところは，先生に積極的に聞きに行き，自分のできないところをすこしずつなくしていこうと思います。

（図 10　参加した生徒の感想の一部）

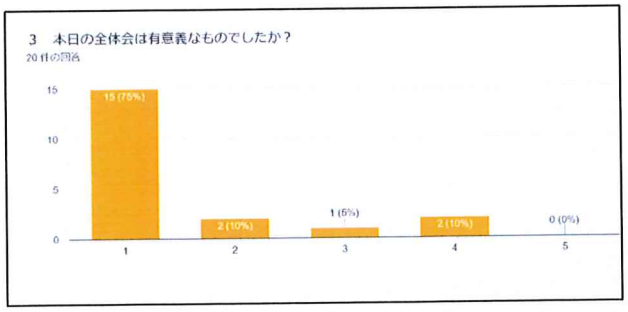
（4）戦略マップの作成

学校課題に基づき「自律（自立）できる生徒の育成（非認知能力の育成）」を目標として設定し，各学年の生徒の実態・課題をもとに，話し合いを行った。話し合いの視点は，学年・学級経営，教科経営，行事など様々な教育活動で，自律（自立）できる生徒を育成するために「意識して取り組んでいること」「その意義や目的」と設定した。話し合いを通し，年齢や経験年数によらず，お互いの教育観を共有することを目指した（図11）。



（図 11　話し合って作成した戦略マップ）

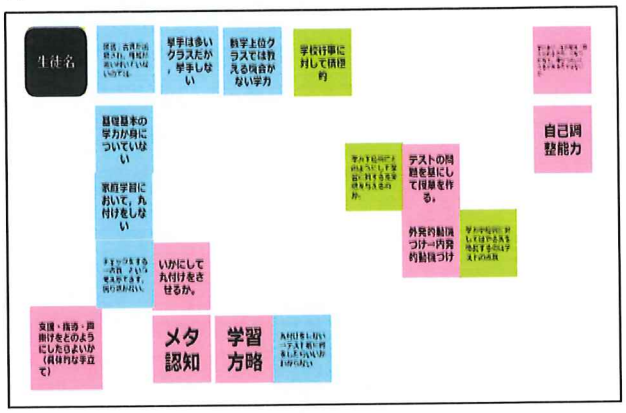
アンケートからは，９割以上が「有意義であった」「新しい学びや気付きがあった」との回答が得られた（図12）。また，自由記述からは，「学校目標，学校課題と結びついた目的であった」「経験年数が浅い深いに関係なく，自律（自立）に向けて教育活動について考えることができたから」「全職員で自律（自立）を教育活動場面において考えられたことが良かった。今後は諸活動のすべてに，非認知能力の育成を意識していく。」などが挙げられ，本校が目指す「自律（自立）」に向けた手立てとして，戦略マップの作成は有意義な取り組みであったことが推察された。



（図 12　話し合い後の職員アンケート結果）

（5）個に焦点化した研修会の実施

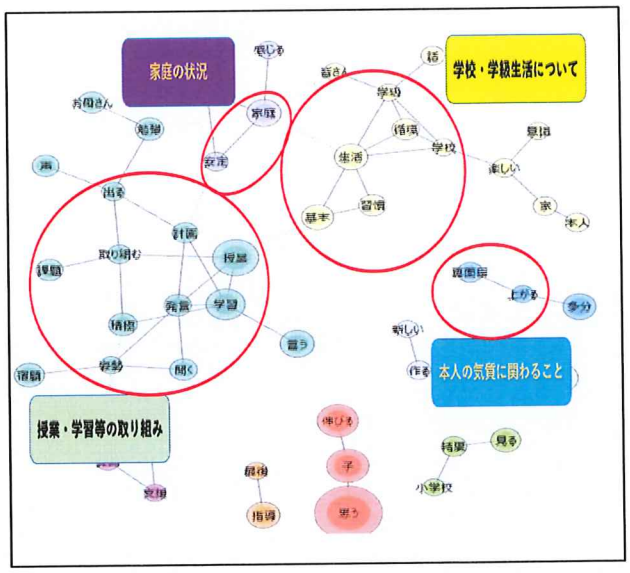
市学力調査の結果や定期考査を活用し，学力と非認知能力の伸びが大きかった生徒を話題にした研修会を実施した。対話の視点は，「伸びたと考えられる要因」と「その生徒に対する支援・指導・配慮等」とし，共有したことをまとめた（図13）。



（図 13　個に焦点化した校内研修の記録）

「学力が伸びた」生徒を取り上げたが，話し合いは，生徒のエピソードをもとに，多角的な視点で行われており，指導法や授業づくりだけではなく，生徒の内面に関することや家庭のこと，学習方略など，非認知的な側面に及び，年齢や経験年数によらず，自由に意見を出し合えていたことが伺えた（図14）。

さらには，取り上げた一人の生徒を中心として，具体的な事例から抽象的な概念へと話題が発展したり，他の生徒の支援についても話題が発展したりする学年もあった。



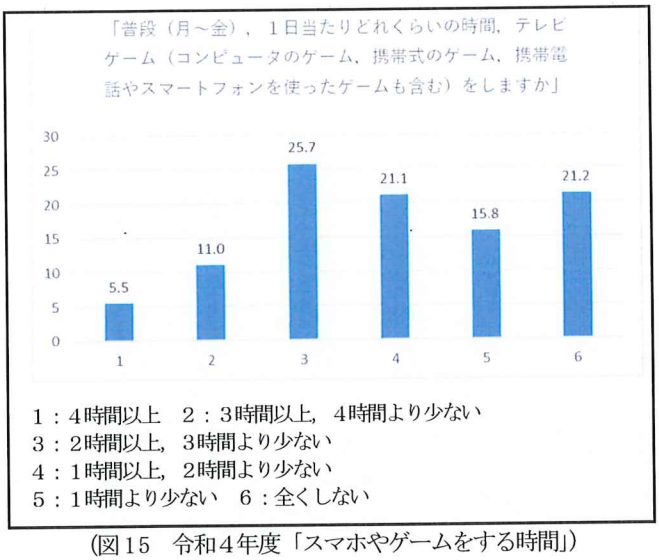
（図 14　対話のテキスト分析による共起ネットワーク図）

アンケートからは９割以上が「有意義であった」「新しい学びや気付きがあった」との回答が得られた。自由記述からは，「伸びている生徒を題材に伸びる要因や先生方の取り組みを知ることができた（スキルの共有）」

「伸びの高い生徒には共通項が見られた。他の生徒にも同じ状況を作り出したい（他の生徒への波及）」「生徒の見方をシェアするだけで，先生方が伸びることが分かった（資質・能力の向上）」「生徒一人一人に対して，色々な視点で教員が考えていることを共有することができた（教育観の共有）」などの回答が得られた。

3　成果と課題

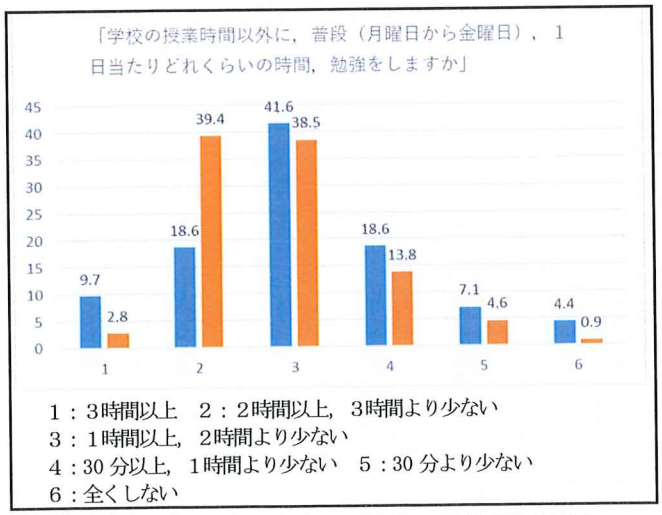
昨年度課題としていた「スマホやゲームをする時間」について，昨年度は３時間以上が38％だったが，今年度実施した調査結果（図15）では16.5％と改善されている。



（図15　令和４年度「スマホやゲームをする時間」）

また，家庭学習時間について（図16），グラフの左が昨年度，右が今年度の結果である。２時間以上学習している割合は昨年度が28.3％に対し，今年度は42.2％であった。

これらのことから生活改善について大きく改善することができたと言える。



（図16　令和３年度と令和４年度の「家庭学習時間」）

非認知能力については，「将来の夢や目標を持っているか」の質問に対し，当てはまる・どちらかといえば当てはまると答えた割合が6.4％，「自分でやると決めたことはやりとげるようにしていますか」では7.6％，昨年度よりも伸びていた。このことから生徒主体性を尊重した実践と志教育の推進の成果と言える。

これらのことから，学校全体としての取り組みの効果が出ていると考えられる。生徒に対してだけでなく，職員間における戦略マップの作成を通し，学校課題に対し，各学年の実態を基に対話をすることで，生徒の育成についての方針を明確化（Plan）することができた。また，個に焦点化した研修を通し，各学級や各教員がどのような取り組みを行い，どのような成果が出ているのかを検証することができた(Check)。また，それらの取り組みを一般化・再検証，再構築していく(Action)ことで，多くの生徒へと波及効果が期待された。

今後の課題としては他者との協働スキルと感情コントロールスキルと捉えている。自己管理能力を身に付けた生徒が，その取組を自己評価し，自分を磨き上げて自分の生き方や志（目標）の実現にまで発展させたい。そのためには，教師が生徒に手を出しすぎて甘やかしている場面はないか。生徒が主体的に取り組める場面を教師が奪っている場面はないか。生徒から決して目を離さずに，中学生という発達段階を踏まえた取り組みを考えていきたい。

4　おわりに

これまでは学力調査等の点数にこだわり，授業改善や学習課題に関しての話し合いが主であった。しかし，学習指導要領に示されているように「主体的・対話的で深い学び」を実現するには，「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という，子どもたちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある。

今後も生徒たちの自律（自立）のために，全職員で共通理解を図り，生徒たちの非認知的スキルの向上を目指した教育活動を継続させていきたい。そして，資質・能力を身に付けさせ，生徒たちが生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにするために，志教育の推進と非認知能力の育成を通して，子どもたちが自らの夢や志をかなえられるように学校全体で取り組んでいきたい。